

from ザンビア
Zambia



リビングストーン

授業研究で より良い学びを

この数年、アフリカ南部のザンビアで、学校の先生たちが力を入れていることがある。全ての子どもたちに、より良い教育を届けたい。その一心で取り入れられているのが、日本でもなじみの授業研究だ。

写真：渋谷敦志（フォトジャーナリスト）



ブルング小中学校は、1クラス40人以上が学ぶマンモス校だ

難しい理数科の授業を ひと工夫したい

「好きな科目は何？」
「英語!」「理科!」「算数!」
真つ青な空の下、校庭に響く子どもたちの声。休み時間、教室から飛び出してきたどの子も元気いっぴい。3月初旬、ザンビアの首都ルサカから車で約2時間の町、ムンバにあるブルング小中学校を訪れた。

「カーン、カーン、カーン」。この学校では、校庭にあるドラムをたたく音が授業開始の合図。ある教室では、中3の理科の授業が始まっていた。理科を教えるのは、ンジエクワ・ムンディア先生。黒板にチョークを走らせ、今日のトピックを書く。「DENSITY」。

この時間は、「密度」について学ぶようだ。

「では、前に実験器具を取りに来てください」。6つに分かれたグループの代表が、水の入ったメスシリンダー、小石、ひも、量りを持っていく。「メスシリンダーの中に石を沈めて、どれくらい水量が上がるか、目盛りを見て記録してください」。ムンディア先生の指示に、顔を見合わせながら、ヒソヒソ声で相談する生徒たち。思春期ならではのシャイさは、日本の中学生と変わらない。

この日の授業は、いつもと少し違った。教室の後ろや横に、他のクラスの先生がずらりと並んでいるのだ。どうやら保護者ではないようだが、「授業研究なんですよ」。先生の一人が、そう教えてくれた。この日のために、みんなで練り上げた授業案が効果的に進むか、ムンディア先生の授業で試しているのだ。

「今日の授業の振り返りをしましょう」
授業が終わり、生徒たちが給食を食べている間に、先生たちが机を寄せて会議が始まった。これから授業研究の本番だ。「実験を取り入れたのは、分かりやすかった」「でも本当に、密度の概念を理解できた子は少ないのではないか」「答えを出す前に、生徒たちにもう少し考えさせる時間があつ

ても良かった」。手元の評価表を基に、さまざまな意見が飛び交う。校長のジョブ・ムブワ先生も参加し、「子どもたちが教室で学んだことを、教室の外でいかに生かすことができるか。それができなければ意味がない」と熱く訴えていた。

先生による 先生のための授業研究

「アフリカの中でも、ザンビアは授業研究が制度として導入されている数少ない国の一つなんですよ」。そう教えてくれたのは、10年以上、この国の教育改革を緑の下で支えてきた中井一芳専門家。静岡県の公立中学で教員をしていた中井専門家が、国際協力の世界

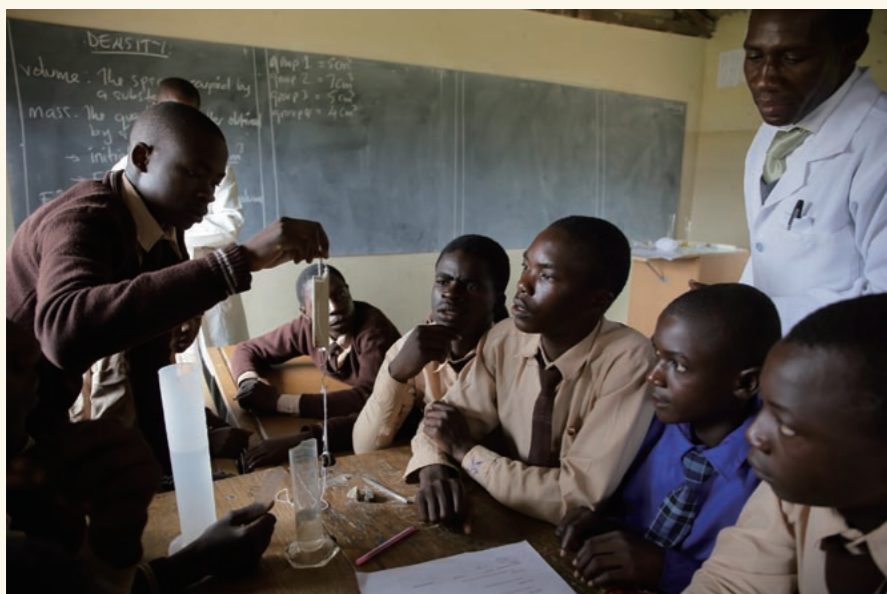
に飛び込んだのは22年前。青年海外協力隊としてソロモン諸島で理科を教え、その後も、ケニアやフィリピンで理数科教育の質の向上に奔走してきた。そんな中井専門家がザンビアで挑戦してきたのは、かつて自分も日本で取り組んだ「授業研究」だった。

学校に行ける子どもの数は9割を超えたザンビアだが、授業に付

密度について学ぶ生徒たちとムンディア先生。小石の重さと体積を調べ、それを割った数が密度。その説明を受けて、計算練習が始まった



授業の後は先生たちが集まって話し合い、良かった点、改善すべき点を挙げ、次の授業に生かしていく



ザンビアの小学校で学ぶ少年。学ぶ環境がどうであれ、子どもたちは生き生きと机に向かっている



リビングストーンで行われた教育関係者の会議。約1週間にわたり、さまざまなトピックで質の良い教育を目指して活発な議論が交わされた



教室が足りない学校は、授業が午前と午後の二部制。しかし時間がもったいないからと、空き時間には外で授業も行われていた

ルサカから飛行機で約1時間、国内線で移動していると、眼下に壮大な風景が広がった。世界三大瀑布の一つ、ザンビア屈指の観光

みんなで考え、情報を共有する場
期待をしてしまう。今日は私たちがだけで行く。授業研究のノウハウはきちんと把握しているので大丈夫だ」と、バンダ所長が力強く答えてくれた。この言葉を聞いた時、中井専門家は「授業研究が制度としてきちんと根付けば、この国の教育は大きな可能性が開ける」と考え、黒子に徹して普及に取り組みんできた。

スポットとして知られるビクトリアの滝だ。
その玄関口、リビングストンの市街地を抜け、州の施設内の会議室に集まっていたのは、ザンビア各州の教育関係者たち。年4回、授業研究を含む取り組みについて共有し、課題解決の道筋を開くために一堂に会しているのだ。「このように、みんなで意見を共有する場は貴重です。教育は子どもたちのためにあるべき。そのためには、私たちは切磋琢磨して改善に

努めなければなりません」と、エスパー・チザンベ教育部長は力強く話してくれた。
翌日、近隣のリンダ・ウェスト小中学校に行くと、子どもたちが元気な声と踊りで出迎えてくれた。数学の授業を見学させてもらうと、その時間はルートの計算方法の勉強。黒板に書かれた問題をノートに書き写し、回答したものをメキウエ・ムトンボ先生がチェックしていく。この日も後ろには、他のクラスの先生たちの姿があっ

た。「生徒を前に出させて、黒板に回答を書かせたのは良かった」「計算の時間が足りなかったのでもう少し問題の量を少なくしては」。授業後も先生たちの熱い議論は続いた。
「今まで教員同士が情報共有する場がなく、一人で悩んでいることも多かった。みんなのアイデアが集まればより良い授業ができます」。先生たちは、その声をそらえて話してくれた。
こうしてザンビア全土に広まった授業研究は、さらなる定着を目指し、先生の卵が学ぶ教員養成校にも取り入れていく予定。「日本が協力したからでなく、ザンビアの人たち自身が授業研究を自分たちに必要なものとして取り入れてきたのが成功のカギ。熱意を持って取り組む先生たちは、この国の教育の財産です」と中井専門家は話してくれた。
子どもたちの純粋な「学びたい」という思いと、それを全面から応援したいと奔走する先生たち。それを影でしっかりと支える日本人専門家たち。ザンビアの教育現場は、これからの10年で、さらに大きく変化を遂げていくはずだ。

リンダ・ウェスト小中学校で、授業後の検討会に参加する濱良枝専門家。ザンビア教育省で、授業研究を含む教育政策全般のアドバイザーを務めている



[上]授業中に先生が子どもたちを見て回る「机間巡視」も、効果的な授業の手法として取り入れられている
[下]中井専門家はザンビア歴約10年。日本での教員経験もあり、頼もしい存在だ

さらにJICAの長期研修員として広島大学の大学院で修士号を取る中で、日本の先生方の教育に対する情熱に感銘を受けました。授業研究を通じて、この熱をザンビアにも広めたい。その一心でここまでできました。そうバンダ所長は話す。
その決意を中井専門家が目の当たりにしたのが、ある日、授業研究を実践している学校にモニタリングに行く時のこと。中井専門家たちも同行しようとする中、「日本人が来ると、先生たちが過剰な

いていけず、落第してしまう子が多い。その要因の一つが、指導力不足。先生に研修を行うにも、遠隔地に分散している学校から1カ所に集める予算がない。それなら校内で、先生同士が学び合う場をつくらなければならない。それにピッタリなのが、日本の先生たちが力を入れてきた授業研究だった。しかし、「最初は考え方を変えてもらうことに苦労しました」と中井専門家。研修といえば教育省が企画し、参加すれば日当が支給されるのが当たり前。そんな環境に慣れてきた先生たちに、自分たちが主役となってアイデアを出し合い、お金がなくても自分の学校で研修が行えることを理解してもらおうのは「並大抵の苦労で

は済まない」と覚悟していた。
実践的な実験キットは全て手作り
しかしその不安を吹き飛ばすかのように、学校現場には、授業研究に意義を見いだす先生が何人もいた。その一人が、理科の授業で教本を執ってきたベンソン・バンダさん。そこで現在、バンダさんが所長を務めるルサカの国立科学センターを訪ねてみることに。教育省が所管するこのセンターは、理科教員の研修や教材開発を行う組織だ。
「見ていただきたいものがあるので、こちらへどうぞ」。案内された部屋のドアを開けると「ガガガッ、ガガガッ」と、工事現場の

ような音が部屋中に響いた。何人もの作業員が、ノコギリで木を切ったり、大きな鉄板をつなぎ合わせたりしている。「授業研究を重ねる中で、やはり最低限必要な実験器具がないと実践的な授業は難しいと。でも教室の数も足りない中で、理科室を設置するのは非現実的。そこで、シニア海外ボランティアの方と開発したのが、モバイル実験キットです」。可動式の棚の中に、ピーカーやアルコールランプ、電気の配線や試験管立てなど、理科の実験ができる基礎的な道具が入っているもの。まさに「動く理科室」のよう。現場の先生にも評判が良く、全国の学校に配布され活用されている。
「中井さんと一緒に仕事をし、



センターの技術者と共に実験キットを調整するバンダ所長